

高鍋町教育研究所

I	研究主題と副題	1-3-1
II	主題設定の理由	1-3-1
III	研究目標	1-3-2
IV	研究仮説	1-3-2
V	研究の全体構想	1-3-2
VI	研究組織	1-3-2
VII	研究の実際	1-3-3
1	基本的な考え方	1-3-3
(1)	研究主題について	1-3-3
(2)	「学力向上」とは	1-3-4
(3)	「アクティブ・ラーニング」とは	1-3-4
2	アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業実践	1-3-5
(1)	小学校における授業実践（算数）	1-3-5
(2)	中学校における授業実践（数学）	1-3-5
(3)	授業実践レポート	1-3-6
(4)	授業実践の例	1-3-7
3	学力の定着の様子をみる取組	1-3-8
(1)	国語（小学校と中学校における取組）	1-3-8
(2)	算数・数学（小学校と中学校における取組）	1-3-9
VIII	研究の成果と課題	1-3-10
1	研究の成果	1-3-10
2	今後の課題	1-3-10
○	引用・参考文献		
○	研究同人		

I 研究主題と副題

主体的に考え、豊かに表現できる児童生徒の育成
～ 各教科における取組を通して ～

II 主題設定の理由

現在、高鍋町では、秋月種茂公の「国づくりは人づくり」の教えを受け継ぎ、宮崎県教育基本方針・第二次宮崎県教育振興基本計画・教育施策の趣旨に立脚し、「文教のまち高鍋」の伝統と地域の実態に即して、町の将来像や高鍋町総合計画、「高鍋町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を踏まえた教育を推進している。特に学力向上の推進では、新しい教育の動向と町民の教育に対する要請に対応する教育体制の確立を目指している。そのために、学習指導の充実に関する施策としては、次のような実践事項を掲げている。

- **基礎的・基本的な知識・技能の習得とそれを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力及び表現力等を育成する指導方法の工夫改善による学力向上**
- **各教科における言語活動の充実** ○ **ICTを活用した学習指導の工夫**及び先進地視察
- **幼保・小・中・高連携の推進** ○ **町教育研究所の研究推進**
- 多様な経験・体験活動等「生きる力」の育成を目指した特色ある教育活動の推進
- 小学校段階における外国語活動の充実
- 算数・数学科 Web 学習単元評価システムの活用推進 ○ 町単独雇用講師の効果的活用
- 地域の教育力や体験的な活動の積極的な活用と学習形態・指導形態の工夫

これらを踏まえ、本教育研究所では、今年度から本町の喫緊の課題である「学力向上」に関する研究に取り組むことにした。学習面に関する本町の児童生徒の実態は、「全国学力・学習状況調査」や「みやざき小中学校学習状況調査」等の結果から、「活用する力（記述式問題）」の不足や基礎的・基本的な力が十分に身に付いていない「学力下位層」の割合が多く見られる。特に学力下位層の児童生徒は、授業への取組が消極的であるので、指導方法の工夫改善を図ることにより、子どもたちの学習意欲を喚起し、授業に主体的に参加できる児童生徒の育成が強く求められている。

また、社会環境の急激な変化に伴って「キャリア教育」の重要性が増している今、「基礎的・汎用的能力」を備え、思考力、判断力及び表現力があり、周りとの円滑なコミュニケーションがとれる児童生徒の育成を図ることが急務になっている。

そこで、研究主題を「主体的に考え、豊かに表現できる児童生徒の育成」とし、副題は、研究員の校種や教科の違いを考え、「各教科における取組を通して」とした。研究内容については、上述した本町の教育施策の中から、下線部で示した実践事項を中心に進めたい。今年度は研究初年度であり、「基礎的・基本的な知識・技能の習得とそれを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力及び表現力等を育成する指導方法の工夫改善による学力向上」に力点を置きたい。研究に当たっては、まず次期学習指導要領改訂で導入される「アクティブ・ラーニング」について十分に理解し、その手法を取り入れた授業改善を各教科で行い、研究を進めていきたい。

このように、本教育研究所では、上記のような実践的研究を行うことによって、「学力向上」という本町の教育的課題に応え、本町の目指す「郷土を愛し、自信と誇りを持つ子どもの育成」が図られるのではないかと考え、本主題を設定した。

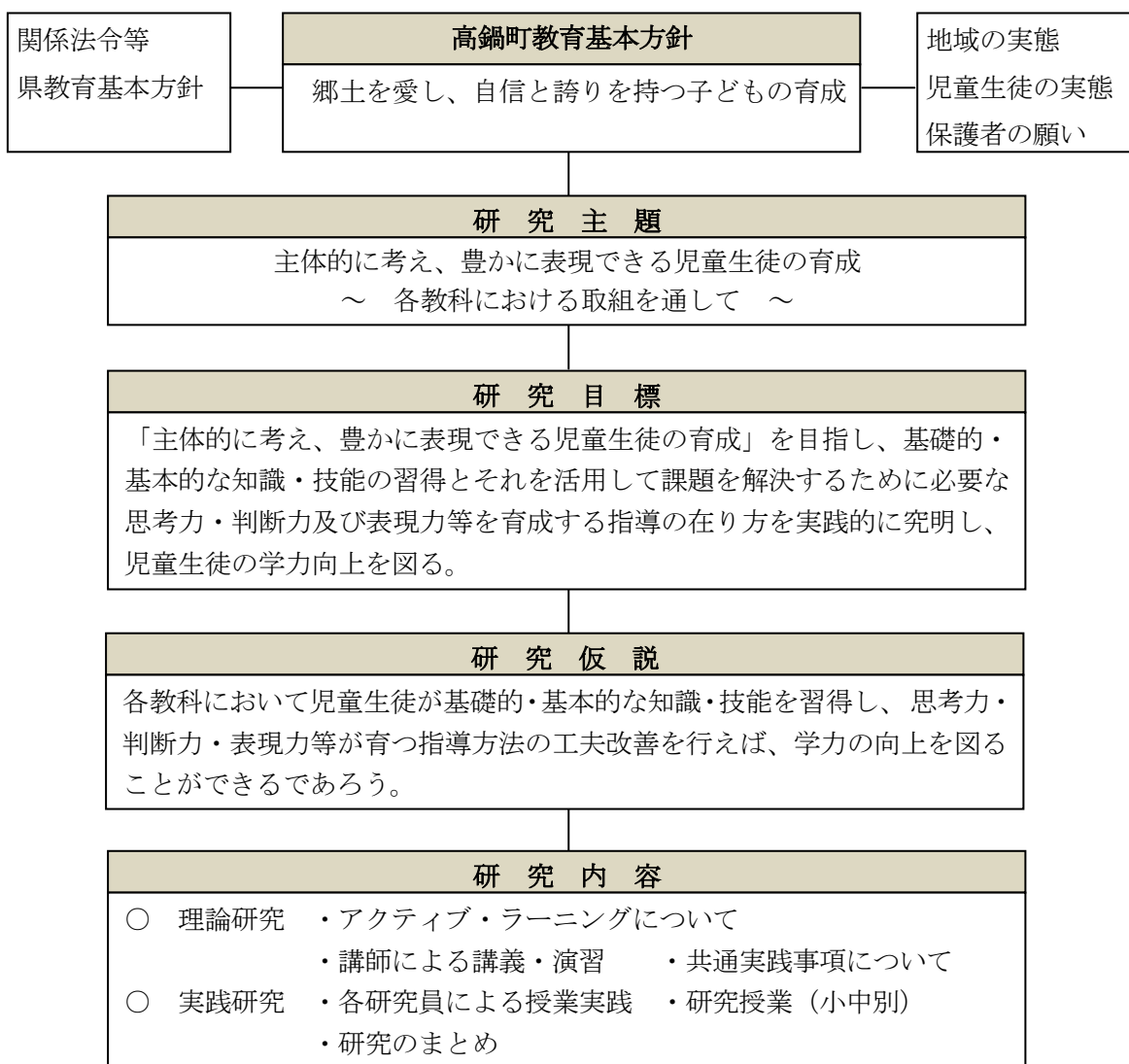
III 研究目標

「主体的に考え、豊かに表現できる児童生徒の育成」を目指し、基礎的・基本的な知識・技能の習得とそれを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力及び表現力等を育成する指導の在り方を実践的に究明し、児童生徒の学力向上を図る。

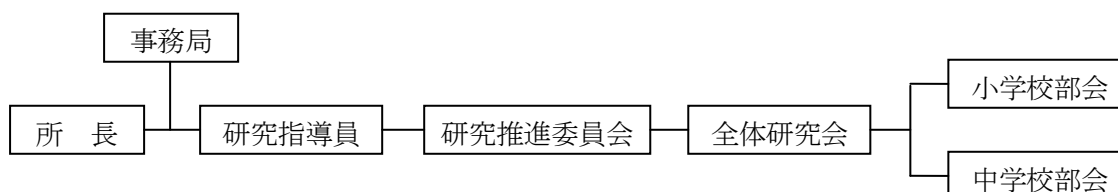
IV 研究仮説

各教科において児童生徒が基礎的・基本的な知識・技能を習得し、思考力・判断力・表現力等が育つ指導方法の工夫改善を行えば、学力の向上を図ることができるであろう。

V 研究の全体構想



VI 研究組織



VII 研究の実際

1 基本的な考え方

(1) 研究主題について

本研究所の研究主題「主体的に考え、豊かに表現できる児童生徒の育成～各教科における取組を通して～」について、どのようにとらえていけばよいか、様々な意見を出し合い、KJ法を用いて、それらをまとめていった。

そして、本研究所は研究主題について、以下のよう
に考え、本町の教育的課題である「学力向上」に
取り組んでいくことにした。



図1 KJ法でまとめている様子

ア 「主体的に考える」児童生徒とは

- 自ら進んで学び、自分の意見をもつことができる児童生徒
- 自ら課題を発見し、知識・技能を活用して課題解決しようとする児童生徒
- 他者の意見を認めながら、積極的に話し合うことができる児童生徒

イ 「豊かに表現できる」児童生徒とは

- 相手意識をもって、伝えたいことを意欲的に表現しようとする児童生徒
- 目的に応じた手立てで、多様な表現を効果的に組み立てることができる児童生徒
- 目の前の事物・事象に対して様々な感じ、それを言葉に表すことができる児童生徒

(2) 「学力向上」とは

本町の教育的課題である「学力向上」の「学力」とは、どのようなものを指すのだろうか。文部科学省は、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちには「生きる力」、「確かな学力」が必要であると言っており、下の図のとおり、確かな学力を「知識・技能に加え、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力など」ととらえている。つまり、学力を単に基本的な知識・技能とせずに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度を兼ね備えたものだととらえているのである。

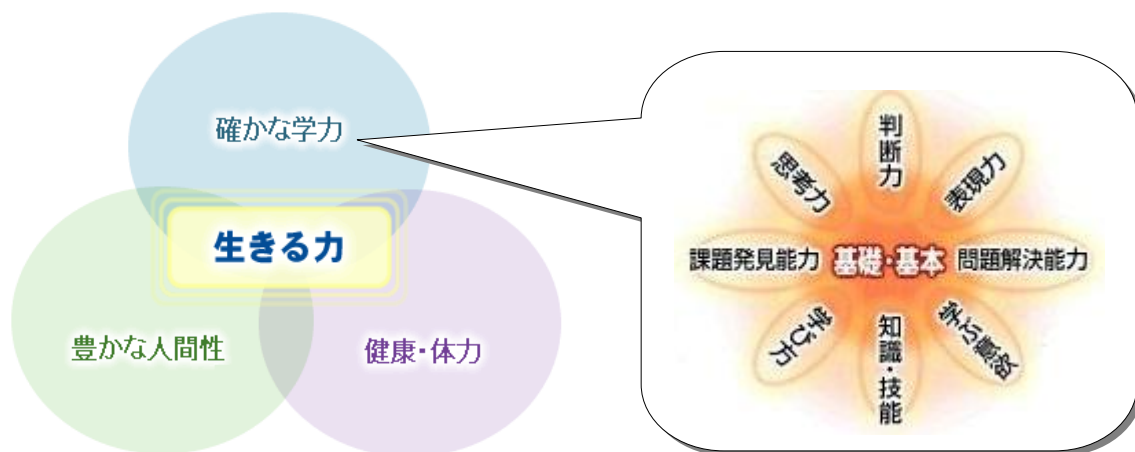


図2 「生きる力」、「確かな学力」 (文部科学省HP)

そこで、本研究所においても、「学力向上」を単なる「知識・技能」の習得（詰め込み）とせず、「理解を伴った知識・技能」の習得や「知識・技能を活用し、問題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」の向上としてとらえていくものとする。特に、各教科の授業においては、アクティブ・ラーニングを率先して導入し、児童生徒の学習意欲を高めながら、効果的に学力向上が図れるように実践を進めていくようにする。

また、その成果を図る手段として、定期テストや小テスト等に記述式を中心とした「知識・技能を活用して問題解決を図る問題（思考力・判断力・表現力を問う問題）」を設定し、状況の把握に努め、普段の授業においても、それらを意識して授業を構築していくようにする。

(3) 「アクティブ・ラーニング」とは

平成27年8月に文部科学省から出された論点整理によると、アクティブ・ラーニングを「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」としており、本研究所でも同じ定義で研究・実践を進めていくことにする。

また、8月17日に本研究所において、中部教育事務所から国生尚指導主事を講師として招き、講義をしていただいた。その中で、アメリカ国立訓練研究所による平均学習定着率調査の話があり、自ら体験したり、他の人に教えたりするということが、単に講義形式で授業を受けることに比べて、格段に定着率が違うということを学ぶことができた。

表1 平均学習定着率調査

「授業で学習した内容を半年後にどの程度記憶しているか。」（アメリカ国立訓練研究所）

講義	5%
読書	10%
視聴覚	20%
デモンストレーション	30%
グループ討議	50%
自ら体験する	75%
他の人に教える	90%

つまり、自らが主体となって学習に取り組んでいるときは、脳は常にアクティブの状態になっており、この状態をいかに保って授業に取り組ませることができるかが重要であるということである。授業で得た知識・技能を使って、問題を解決するための思考力・判断力・表現力を高める取組が求められている。特に自らの思考をどう表現していくかについては、研究主題とも密接に関わる部分であり、「インプットからアウトプットへ」これが、児童生徒の学力向上を図るうえで大変重要であると考え、研究・実践を進めていきたい。

2 アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業実践

(1) 小学校における検証授業（算数）高鍋東小学校4年生 「面積」

ア 本時の目標

- 長方形や正方形の求積の仕方を考える事ができるとともに、工夫して面積を求めることができる。（数学的な考え方）

イ アクティブ・ラーニングの視点

- 自分の能力に応じた教具を選択する場面を設定している。
- 児童生徒が主体的・協働的に取り組む学習問題を設定している。
- グループ内の多様な意見を交流させる場面を設定している。

ウ 授業の実際

- 前時に学習した長方形と正方形の面積の求め方を使って、L字型の面積を求める方法を個人やグループで考えさせ、一斉で確認した。
- 3つのヒントカードを準備したことで、苦手意識のある児童も自分の能力に応じて考えようとする事ができた。
- 討論形式の学習を取り入れたことで、児童がより深く考えようとする事ができた。
- より活発な児童主体の学習になるためには基礎的・基本的な知識をしっかり身に付ける必要があると感じた。



自分の考えを発表する様子

(2) 中学校における検証授業（数学）高鍋東中学校2年生 「図形の調べ方」

ア 本時の目標

- 班員で協力して、意欲的に問題解決を図ろうとする。（関心・意欲・態度）
- 図形の性質を根拠に角度の求め方を説明することができる。（思考・判断・表現）

イ アクティブ・ラーニングの視点

- 基礎的・基本的な知識・技能を活用する場面を設定している。
- 児童生徒が主体的・協働的に取り組む学習問題を設定している。
- グループ内の多様な意見を交流させて、思考を深めさせている。

ウ 授業の実際

- 星形五角形の5つの内角の和は 180° になることを図形の性質を根拠に個人と班で考えさせ、一斉にて各班の考え方を発表し、図形の性質への理解を深めた。
- 班活動では、既習事項を用いて多様な見方や考えを意欲的に出し合ったことで、全体的にたくさんの解法を発表することができ、生徒たちに関心をもたせる授業ができた。
- 図形の性質を根拠に問題解決を図る授業を繰り返すことで、根拠を伴った知識・技能が定着できたと考察できる。
- 他者に自分の考えを的確に伝えるためには、普段の授業の中で互いの意見を交換する場面や教え合いの時間を多く確保し、数学的な表現を用いて自分の意見を伝える練習を重ねていく必要があると感じた。



班で意見を出し合う様子



班の考えを発表する様子

(3) 授業実践レポート



本研究所8名の研究員によるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実際を分かりやすくまとめるために、下図のとおり授業実践レポートを作成した。それぞれの研究員が2～3枚作成し、集録としてまとめることにしている。

(学校名) 高鍋東小学校 (研究員氏名) 本田 沙世					
授 業 実 践 レ ポ ー ト					
授業日	9月5日(月)	学級名	4年3組	教科名	社会
単元名	ごみのしよりと利用	資料等			
本時の目標	ごみがどのように処分されているのか考え、資料を使って調べようとする ことができる。				
ALの手法・技法・形態等	個人 → グループ → 全体				
アクティブ・ラーニングの内容					
めあて					
ごみがどのようにしょぶんされているのか調べよう。					
1. 分別して出されたごみがどのように処分されているか予想する。					
<ul style="list-style-type: none">・ 地面に埋める・ 海に流す・ 燃やす・ 森の奥に捨てる					
2. ごみ処理場の写真を見ながら、グループで話し合う。 「これはごみを燃やしているところだ。」 「なんでクレーンがあるの？」 「燃やしてどこかに運ぶんじゃないの？」					
3. グループの考えをノートにまとめる。					
4. 全体で話し合って分かったことをまとめる。					
アクティブ・ラーニングの効果 (良かった点…○ 改善を要する点…●)					
○ 自分達で予想する事で、実際はどうか調べたいという意欲が高まった。					
○ グループで話し合いをする事で、なぜもやすのか、どこに運ぶのか、と考えが深まっていた。					
● 写真を見ても何をしているところなのか全く予想できない子は受け身になりがちであった。分からない子は友達の見聞を聞いてしっかり考えようとする指導が必要。					

(4) 授業実践の例

(学校名) 高鍋西小学校 (研究員氏名) 中村 健太

授 業 実 践 レ ポ ー ト

授業日	11月15日(火)	学級名	3年1組	教科名	国語
単元名	慣用句を使う	資料等	ワークシート		
本時の目標	○ 国語辞典を使って慣用句の意味を理解することができる。				
ALの手法・技法・形態等	ブレン・ストーミング				
アクティブ・ラーニングの内容					
<p>学習のめあて</p> <p>慣用句の意味について知ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループをつくり、慣用句に合う意味を選択肢から選ぶ。 なぜその意味になるのか思いついた意見を出し合う。 <p>(例)</p> <p>なんとなく それっぽいから こんなときによく使う言葉だね 先生の話の時に聞いた気がする 等</p> <ul style="list-style-type: none"> できるだけたくさん意見が出るように、自由に発言して良いことを伝える。 全体で国語辞典を使ってことわざの意味について調べ、正しい意味について理解する。 					
 					
アクティブ・ラーニングの効果 (良かった点…○ 改善を要する点…●)					
<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちが想像力を発揮して意欲的に活動する姿が見られた。 ○ お互いの意見の相違点を話し合っていた。 ○ 選択肢から選ばせる形にすることで、意味を正しく把握するきっかけになった。 ● 慣用句について詳しく知っている児童には物足りない内容だったように思える。 ● 自分の意見をなかなか言えない児童への対応が足りなかった。 					



(学校名) 高鍋東小学校 (研究員氏名) 川原 裕一郎

授 業 実 践 レ ポ ー ト

授業日	10月13日(木)	学級名	6年2組	教科名	国語
単元名	日本の文字に關心を特とう	資料等			
本時の目標	平仮名と片仮名の由来と特色について理解する				
ALの手法・技法・形態等	グループワーク				
アクティブ・ラーニングの内容					
<ul style="list-style-type: none"> ○ 万葉仮名について確認を行う ○ 平仮名と片仮名のそれぞれ「あ行」のもとになった文字を確認する。 ○ 同じ音でも異なる万葉仮名がもたれていることから「文字のでき方に違いがあるはずだ」という課題意識を持たせる。 <p>めあて</p> <p>「ひらがな」と「カタカナ」のでき方の違いについて考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ それぞれ50音のもとになった漢字が一覧になっている資料を配り、でき方の違いについて説明ができるよう班で話し合いを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 必ず例となる文字を使って説明すること ・ 平仮名と片仮名のでき方の違いが明確になるように説明すること ○ グループごとに発表を行う。(実物投影機を使用) 平仮名は万葉仮名全体をくずしてつくられている。片仮名は万葉仮名の一部を切り取ってできたものという説明にすべての班が到達することができた。 ○ 「奈」と同じ万葉仮名から「な」と「ナ」ができる理由について説明する。 					
アクティブ・ラーニングの効果 (良かった点…○ 改善を要する点…●)					
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分達で平仮名と片仮名の特色を考えたことによって、児童が他の文字についても説明することができた。 ○ 実物投影機を使用したことがよかった。 ● ワークシートを活用するより思考が深まったのではないかと考えられる。 					

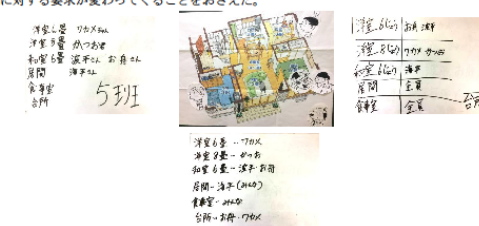
(学校名) 高鍋東中学校 (研究員氏名) 黒木直子

授 業 実 践 レ ポ ー ト

授業日	6月7日(火)	学級名	2年1組	教科名	数学
単元名	連立方程式の利用	資料等	ワークシート、基石		
本時の目標	基石の数がなぜ分かったのかを説明しよう				
ALの手法・技法・形態等	班 → 一斉				
アクティブ・ラーニングの内容					
<p>学習課題</p> <p>基石の数がなぜ分かったのかを説明しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 江戸時代の子どもの遊び「さっさ立て」というゲームを例に出した。これは、連立方程式を利用して、基石の数を考えるという内容である。 <p><授業の流れ></p> <ol style="list-style-type: none"> ① 生徒2人と教師の3人で、「さっさ立て」ゲームをやってみる。「さっ」というかけ声だけでなぜ教師が生徒2人の持っている基石の数を当てることができたのかを考えさせる。 ② 基石を使って、各班で実際に「さっさ立て」ゲームを行ってみる。基石の数を当てられた根拠を自分たちで考える。 ③ 一斉にて解説をする。基石を取る数を x、y において、連立方程式を立てると簡単に基石の数が分かることを理解させる。 					
 					
アクティブ・ラーニングの効果 (良かった点…○ 改善を要する点…●)					
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちでゲームをすることで、生徒たちの意欲関心が高まり、自分たちで表をつくり、式を立てようとしたりと積極的に問題解決を行った。 ○ 連立方程式への理解を深め、そのよさに気づくことができた。 ● 文字を使って式を立てようとする班が少なかった。事象を整理できずに、何を文字におきかえればいいのか分からずに、等式を立てることを戸惑っていた。 					

(学校名) 高鍋中学校 (研究員氏名) 宮本 由宇

授 業 実 践 レ ポ ー ト

授業日	10月24日(月)	学級名	1-1	教科名	家庭科
単元名	衣生活・住生活と自立	資料等			
本時の目標	住まいの空間と家族の生活行為との関わりについて考えさせる				
ALの手法・技法・形態等	個人思考 → 班の話し合い → 一斉				
アクティブ・ラーニングの内容					
<p>学習のめあて</p> <p>住まいの空間と家族の生活行為との関わりについて考えよう</p> <p>『波平さん、お舟さん、かつお君(中3)、わかめちゃん(中1)の4人で暮らしていたところ、数年間海平さんと一緒に暮らすことになった』という設定で、どのような部屋の割り振りをするか理由と共に考えさせた。個人思考を行い、それぞれの立場に立ち班で話し合った。全体で、各班の考えを共有したのち、互いに気持ちよく生活するためには住まう人への思いやりが必要であることやライフステージや人数構成・家族構成の変化によって住まいに対する要求が変わってくることをおさえた。</p>					
					
アクティブ・ラーニングの効果 (良かった点…○ 改善を要する点…●)					
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分たちの年代を中心に部屋を決めるのか、一家の主を中心に決めるのかなど、互いの考えを知ることができた。決められた空間の中で、互いに気持ちよく生活するためには住まう人への思いやりが必要であることやライフステージ・人数構成・家族構成によって住まいに対する要求が変わることも学ぶことができた。 ● 発表をする際、配置図を視覚的に提示できるとよかった。 					

3 学力の定着の様子をみる取組

本研究所では「平成27年度全国学力・学習状況調査報告書」の中から、正答率の低い問題に注目した。そして、本地区における児童・生徒の実態を知るために、抽出校において、同じ問題を実施した。その結果の分析を受けて、授業の工夫改善を図ることとした。

(1) 国語

ア 小学校における取組

(ア) 全国での傾向

書くこと（国語B² 三 正答率 41.8%）

図やグラフなどを読み、自分の考えを伝えるために効果的に用いたり、文章と図やグラフなどと関係付けて自分の考えを書いたりすることに課題があり、指導の充実が求められる。

(イ) 本地区の傾向

全国平均と比べると、さらに正答率が低く、資料などと関係付けながら自分の考えを表現することに対して課題があるということが分かった。

(ウ) 指導の工夫と今後の取組

- 国語の学習だけでなく、他教科でも、図表やグラフ、絵、写真などを用いて、その資料が何を表しているのか、どんな情報を表しているかを考えさせ、説明する機会を設けるようにした。
- 説明する文章を書く際に自分が参考にした資料などを用いて、自分の考えをまとめる際に、それらの資料を関係付ける習慣をつけるようにした。
- 児童が考えを発表する際に、お互いの表現の良かったところを見つけ、表現する機会を意図的に設けるようにした。
- 今後の取組として、年度末に類似問題を解かせ、その結果から生徒の変容を分析し、これからの授業の改善や指導の工夫につなげていきたい。

イ 中学校における取組

(ア) 全国での傾向

書くこと（国語B¹ 三 正答率 56.6%）

伝えたい事実や事柄について自分の考えを表しているが、根拠を明確にして書く点に課題がある。

(イ) 本地区の傾向

全国の解答類型と同様、資料提示の理由を具体的に書くことができない生徒が多く見られた。つまり、目的に応じて文章や資料から必要な情報を取り出してはいるが、それらを基にして根拠を明らかにしながら自分の考えをまとめる点に課題があると考えられる。

(ウ) 指導の工夫と今後の取組

- 自分の考えをまとめる際に、根拠とした部分に線を引かせたり、複数の資料の中から、自分の考えの基となった記述を選ばせたりして、読み手や聞き手に説得力のある文章が書けるように指導した。
- 接続語の使用や段落構成の工夫などによって、読み手や聞き手に対してどの部分が根拠であるかが分かるように示されているかなど、文章を複数の観点から見直すように繰り返し指導することも今後は必要だと感じている。
- 今後の取組としては、年度末にこの問題の類似問題を解かせ、その結果から生徒の変容を分析し、これからの授業の改善や工夫につなげていきたい。

(2) 算数・数学

ア 小学校における取組

(ア) 全国での傾向

割合（算数B²）(2) 全国正答率 13.4%

基準量、比較量、割合の関係を正しくとらえることに依然として課題があり、指導の充実が求められる。

(イ) 本地区の傾向

全国平均と比べると、正答率がさらに低く、自分の考えを振り返り、誤りの原因や正しく判断できた理由を明らかにするとともに、的確に修正できる力に課題があるということが分かった。

(ウ) 指導の工夫と今後の取組

- 示された情報から基準量と比較量、割合の関係を正しくとらえることができるよう関係図等を用いながら、数量関係が視覚的に情報を考えることができるよう指導を行った。
- 授業の中でお互いに説明し合うような活動をする機会を意識して取り入れた。
- 今後の取組として、年度末に類似問題を解かせ、その結果から生徒の変容を分析し、これからの授業の改善や指導の工夫につなげていきたい。

イ 中学校における取組

(ア) 全国での傾向

関数領域（数学B¹）(3) 全国正答率 12.3%

与えられた情報から必要な情報を選択し、的確に処理すること、その結果を事象に即して解釈すること、数学的な表現を用いて解釈した理由を説明することに課題があり、指導の充実が求められる。

(イ) 本地区の傾向

全国と比べるとさらに無解答率が高く、全国と同様、数学的な表現を用いて説明することが課題であるということが分かった。

(ウ) 指導の工夫と今後の取組

- 関数領域の授業においては、「比例、反比例、一次関数」の式やグラフなどの基礎的・基本的な内容を定着させるために、それぞれを比較しながら考えさせることを大事にした。
- 授業の中で、「なぜ」を大事にし、根拠となる事柄を問う場面や、ペアや班で話し合う活動を多く取り入れた。そのとき、他者に分かりやすく伝えるために、根拠となる事柄を図や式、数学的な表現を積極的に用いて説明するように指導を行った。
- 自分の考えを発表する場面では、互いの表現のよいところや改善点を出し、自己の表現を振り返り、修正していくように指導を心がけた。
- 定期テストでは記述式問題を取り入れ、生徒たちの実態を把握することを心がけた。
- 今後の取組としては、年度末にこの問題の類似問題を解かせ、その結果から生徒の変容を分析し、これからの授業の改善や工夫につなげていきたい。

VIII 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 研修会や理論研究会をとおして、アクティブ・ラーニングの定義やアクティブ・ラーニングを進める上でのポイントを教師間で共有することができた。
- 授業研究会や授業評価を行うことで、教師の授業改善の意識を高めることができた。
- 各教師がアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を行い、良かった点や改善すべき点を協議することで、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた実践的な取組について理解を図ることができた。

2 今後の課題

- アクティブ・ラーニングの効果について実践的な検証を続け、児童生徒の学習意欲を喚起する指導法を研究する必要がある。
- 本研究の推進のために、各学校との研究の連携や各学校での共通実践事項を工夫する必要がある。
- 学力向上のために、授業モデルの開発や学習規律の徹底をしていく必要がある。
- 授業だけでなく、家庭学習の充実のために保護者との連携を深めていく必要がある。

<引用・参考文献>

- 国立教育政策研究所(2015)「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語」
国立教育政策研究所(2015)「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査報告書 小学校算数」
国立教育政策研究所(2015)「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査報告書 中学校国語」
国立教育政策研究所(2015)「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査報告書 中学校数学」
国立教育政策研究所(2015)「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査報告書 中学校理科」
田中博之(2016)「アクティブ・ラーニング 実践の手引き」教育開発研究所

<研究同人>

- | | | |
|-------|---------|---------------------|
| 所 長 | 島 埜 内 遵 | |
| 研究指導員 | 黒 木 俊 和 | |
| 教育対策監 | 黒 木 倫 徳 | |
| 研 究 員 | 本 田 沙 世 | 川 原 裕 一 朗 (高 鍋 東 小) |
| | 篠 田 岳 彦 | 中 村 健 太 (高 鍋 西 小) |
| | 黒 木 直 子 | 宮 本 由 宇 (高 鍋 東 中) |
| | 神 崎 雅 博 | 緒 方 久 恵 (高 鍋 西 中) |